

# 北東アジアのエネルギー安全保障協力

## —ERINA 国際ワークショップにおける議論の要旨—

鈴木 達治郎

### 1. はじめに

2001年6月26-28日の3日間にわたり、「北東アジアのエネルギー安全保障と持続可能な発展：協調政策に向けての展望」と題するワークショップ（北東アジア経済研究所[ERINA]主催、モンレー国際問題研究所、北東アジア経済フォーラム共催）が新潟県黒川村で開催された。筆者も含め、日本、韓国、中国、ロシア、米国の5カ国から21人の専門家が友好的な雰囲気の中、熱のこもった議論をたかかわした。今回はその概要を紹介する。

### 2. エネルギー安全保障とは？

まず、ライス大学ベーカー研究所のA. ジャッフェ氏が「豊富な（石油の）世界」<sup>1</sup>と題して、世界の石油市場で「資源枯渇や物理的不足が起きる可能性は当分なく、それを前提としたエネルギー安全保障政策は意味がない。むしろ、市場の円滑な運用と危機管理対策に絞るべき」という基調講演を行った。北東アジアでは石油輸入依存度（特に中東）が高まることへの不安が増大しているが、ジャッフェ氏は「深刻な危機がおきる可能性は少ない」と「不必要な不安をあおることは、かえって緊張関係を生みかねない」と警告した。これに対し、国際エネルギー機関（IEA）、アジア太平洋エネルギー研究センター（APERC）、中国などの参加者からは、市場原理ではカバーできないリスクについ

て質問が相次いだ。これに対し、ジャッフェ氏は「安全保障問題や危機管理は重要な課題であり、技術開発や備蓄問題でアジア諸国が協力することが重要である」と述べた。

筆者は、「新たなエネルギー安全保障政策：包括・地域安全保障に向けて」と題する講演を行った。主張のポイントは一国ベースではなく、また石油危機のみならず多様なリスクに対応できる「包括・地域エネルギー安全保障」という概念を提唱した点である<sup>2</sup>。その後、自由化とエネルギー安全保障のジレンマについて議論が移り、政府の役割について明確な哲学と枠組みが必要である、という見解で一応の合意を見ることができた。特に注目されたのは、既にOECD国際エネルギー機関（IEA）が、非加盟国を対象とした国際協力プログラムとして、エネルギー安全保障や新エネルギー技術開発などを扱ってかなりの実績をあげている報告や、東京に拠点を置くAPERCなどでも、地域の共通課題について研究が進んでいるという報告があった点である。このような地道な国際協力が、地域のエネルギー安全保障向上に大きく貢献するものと期待される。

### 3. 天然ガスパイプラインの重要性

今回のワークショップの中心的課題は、「北東アジア天然ガスパイプライン構想」の具体化に向けての議論であった。2日目には中山太郎

<sup>1</sup> Amy Myers Jaffe, "World of Plenty: Energy as a Binding Factor."

<sup>2</sup> Tatsujiro Suzuki, "New Energy Security Policy for Japan and Northeast Asia: Toward Comprehensive and Regional Energy Security."

元外相が東京より駆けつけ、「アジアエネルギー共同体構想」について、そして特にパイプライン構想について、熱の入った講演を行った<sup>3</sup>。中山元外相の具体的提案としては、新潟をはじめ、日本海側の地方自治体や政府が中心となって、各関連国と共催で「国際フォーラム」を提唱した。ワークショップ主催者である ERINA 自体が、新潟県を中心とする 12 地方自治体の共同出資シンクタンクであることも考えれば、この提案は現実化する可能性が十分にある。

ただ、議論の焦点となったのは、やはりパイプラインの経済性、潜在市場の大きさ、投資リスク、安全保障上の懸念とメリット、などであった。とくに、2010 年ごろまでの天然ガスの需要・供給のギャップが示されていたが<sup>4</sup>、LNG の潜在供給量余力やコスト競争力などの分析がまだ不十分な感じは否めなかった。

さらに、パイプライン建設を政府援助なしで行うのか、エネルギー安全保障への貢献を理由に政府が支援すべきなのか、も議論が分かれるところであった。中山元外相によると、北東アジア地域の天然ガス開発およびパイプラインプロジェクトの総額は約 800 億ドルにのぼると推定され、国境を越える地域プロジェクトへの融資は単独国家では行いにくいとして国際協力が不可欠、と訴えた。その対策として、北東アジアに新たな国際金融機関の創設を考慮すべきである、との考えを示したのは注目される。

これ以外に、特に注目される天然ガス関連の論文を紹介しよう。

(1) 「北東アジアとロシアの天然ガス」(V. Ivanov)<sup>5</sup>

北東アジア地域における天然ガスの需要・供

給を一様にレビューしたあと、ロシアの天然ガス埋蔵量は地域の需要を十分に満たしうることを指摘している。しかし、パイプラインの建設可能性はあくまでも需要家側のコミットメントがなければ難しく、その点が不確実性として明確に指摘されている。また、パイプラインと LNG 間の得失（競争）についても、特に長距離になる西アジアー中国・朝鮮半島間などは、LNG の方が競争力があると判断している。

次に、エネルギー安全保障や環境改善といった「公共利益」を考えると、政府がそれなりの支援をする可能性もありうると指摘して、日本、中国、ロシア、あるいは APEC といった政府関連機関における議論の促進を提案している。

最後に、ロシア自体の問題点も指摘し、この問題がロシアにとって経済的にも政治的にも重要な課題であると結論を導いている。日本に在住するロシア人らしい分析で大変興味深い。

(2) 「朝鮮半島におけるエネルギー安全保障と天然ガス需要」(C. W. Lee<sup>6</sup>)

まず韓国のエネルギー政策、需給関係を分析して、天然ガスの重要性を指摘した後、北朝鮮のエネルギー情勢分析を行っているのが興味深い。それによると 1989 年をピークに、エネルギー需要（消費）は減少を続けており、1997 年までにほぼ半減し、75 年当時をさえ下回ったと推定されている。燃料別には石炭依存度が高く（81.3%）、多様化がもとめられている。ロシアとの距離を考えると、当然のことながらパイプラインによる天然ガス導入が可能性として上げられている。

このような情勢から、朝鮮半島全体にとって、ロシアからの天然ガスパイプラインがエネルギー安全保障、および環境の両面で望ましい、と結論が導かれている。ただし、経済性の分析は

<sup>3</sup> Taro Nakayama, Special Address, "Energy Security and Sustainable Development in Northeast Asia."

<sup>4</sup> Younghun Jung, "Sustainable Energy Development for the Northeast Asian Countries."

<sup>5</sup> V. Ivanov, "Northeast Asia and Russian Natural Gas."

<sup>6</sup> C.W.Lee "Energy Security and Natural Gas Demand for the Korean Peninsular."

十分にはされていない。

(3) 「北東アジア・ガスパイプラインフォーラムの活動：国際パイプライン実現に向けて」(S. Abe<sup>7</sup>)

北東アジアの天然ガスパイプラインの推進母体として、活動を続けているフォーラムから、その現状報告があった。2000年までに6回の国際フォーラムを開催しており、昨年のフォーラムはイルクーツクで開催された。

また、プレ・フィージビリティ共同研究も実施されており、今回もその成果が発表された。この概要は日本では三菱総研から発表されている<sup>8</sup>。この研究では、各地域ごとに2010年の天然ガスの需給バランス（供給は資源量または確保済み供給契約）を調査し、パイプラインによりその需給ギャップが埋まることを具体的に示している。さらに、実現可能な案としての地域パイプライン構想も明らかにしており、あとは各国のコミットメントだけ、というところまで来ているようだ（図参照）。

これらの分析や提言を見ていると、北東アジアにおける天然ガスの拡大は、エネルギー安全保障および環境保全にとって、望ましい選択であることは間違いないと思われる。後は、どの程度まで政策支援を行うか、という点に尽きてきている。市場原理のままでは、なかなか前に進みそうにないのもまた事実のようだ。

#### 4. 環境問題解決への貢献

持続可能な発展という点から、やはり議論的となったのは、温暖化対策と中国を中心とする発展途上国の大気汚染問題であった。

特に中国の石炭燃焼に伴う大気汚染の深刻さ

が紹介された。Fengqi 教授の発表によると<sup>9</sup>、有害微量物質、SO<sub>2</sub>、NO<sub>x</sub>、すべての面で、環境規制基準値を満たしていないところが過半数であり、規制そのものが機能していないと見られている。たとえば、WHO 基準値との比較では、有害微量物質で95%、SO<sub>2</sub>で33%が基準値を満たしていない。ただ、最近になって環境政策の徹底により、改善の兆しは見えている。規制値遵守の徹底だけでは効果が薄いので、エネルギー効率改善、環境保全技術への投資支援などを推進しているという。最後に、この環境汚染の改善に向けて、天然ガスの役割がきわめて重要であるとの分析が示されている。

また、天然ガス資源開発だけでなく、利用技術についても推進すべきである、との意見が多かった。すでに市場で競争力を持つ CCGT、マイクロガス・タービンのほか、天然ガス自動車、GTL (Gas to Liquid)、燃料電池など、需要開拓に貢献する技術開発についても、国際協力が必要であるとの指摘が多くの参加者から指摘された。ただ、この点でも、コストの分析までは十分になされていないので、政府の公的支援がどの程度必要なのか、またどの程度効果的なのかが、依然明らかにはされていない。

#### 5. 地域の信頼醸成への貢献

最後に、このような地域協力が国際政治にもたらす好影響について、モンレー国際問題研究所東アジア研究センター長の赤羽恒雄教授が発表を行った<sup>10</sup>。「北東アジアという言葉は、欧米では軍事安全保障の専門家しか知らない。それほどこの地域は潜在的に不安定な地域を見られているということである。」と述べ、一方で「エネルギー安全保障や環境保全などをテーマ

<sup>7</sup> S.Abe "Activities of the Northeast Asian Gas & Pipeline Forum: Toward the Realization of the International Pipeline."

<sup>8</sup> 三菱総合研究所天然ガスパイプライン事業部編著、「国土幹線パイプライン」、2000年11月。

<sup>9</sup> Z. Fengqi, "Environmental Protection and Natural Gas in China."

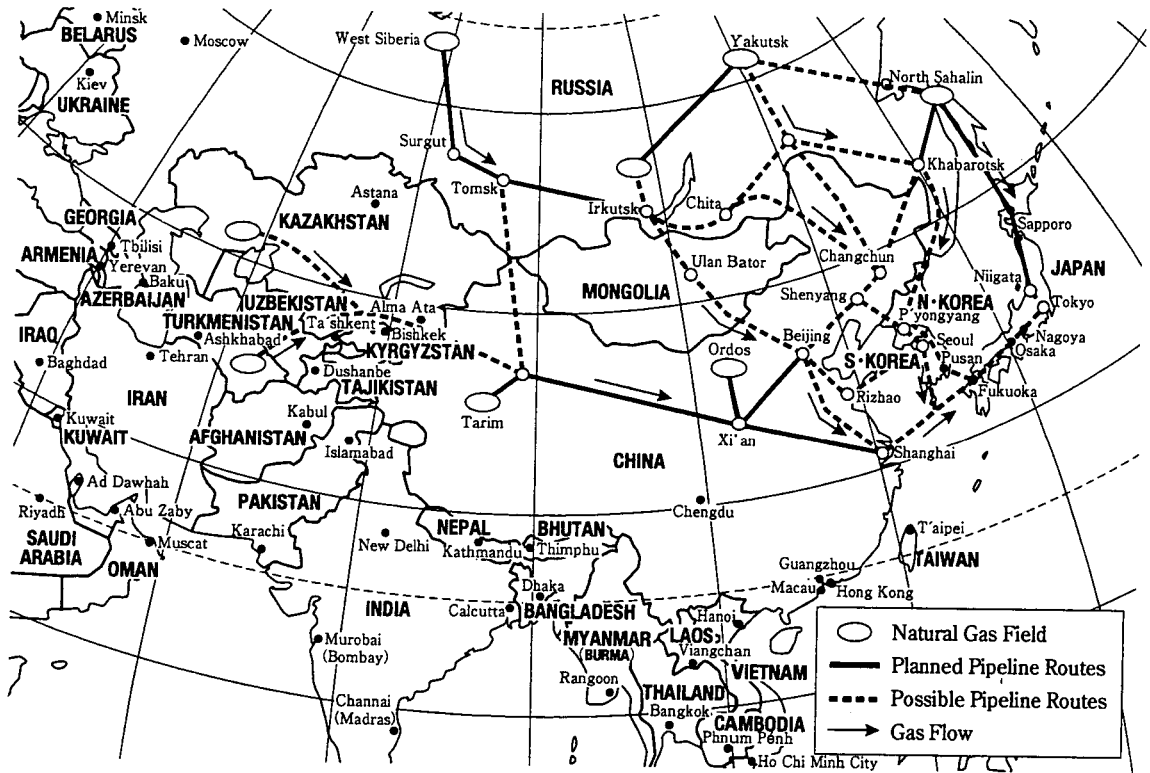
<sup>10</sup> T. Akaha, "Cooperative Policies for Energy Security: Institutional Frameworks."

として、このような地道な対話が継続することが、地域の信頼醸成に大きく貢献する。」と、ERINA をはじめ諸機関の「北東アジア対話協力」を強く支持した。エネルギー安全保障といっても、基本は国際関係の安定化が最も重要な課題であり、特にこの地域は朝鮮半島、中国と台湾、日本とアジア諸国の歴史的対立などがいまだに残り、冷戦構造も完全に消え去ってはい

ない。ASEAN を中心とする東南アジアに比べても、北東アジアの地域対話の実績はまだ浅い。このような観点からも地域エネルギー環境協力構想は重要な意味を持つ点が改めて強調された有意義なワークショップであった。

(すずき たつじろう  
電力中央研究所 経済社会研究所)

北東アジアの国際パイプライン構想



出典：国土幹線ガスパイプライン